

がん医療における コミュニケーション・スキル 悪い知らせをどう伝えるか [DVD 付]

内富庸介, 藤森麻衣子 編

＜書評者＞ 西條長宏（国立がんセンター東病院副院長）

医師が患者とよくコミュニケーションをとり、適切に病状と治療の方向性などを説明し患者の理解と同意を得たうえで、検査や治療を行うことはがん医療の基本である。また、医師と患者のコミュニケーションは人対人のものであり、そこには個人の性格や考え方が反映されることは当然である。患者とのコミュニケーションのなかでも「悪い知らせの伝え方」については、さまざまな研究がなされており、欧米では確立された理論に基づくトレーニングが行われている。

一方、わが国ではそのような教育や訓練を受けたことのある医師はほとんどなく、約半数が「悪い知らせを伝えている医師に立ち合った」程度の“教育”しか受けていない。すなわち、患者とのコミュニケーションは経験に基づくものという考え方が中心になって

きていた。しかし、それではやっていることが正しいか否か誰も自信はもてないとともに、いたずらに患者の不安感をあおったり逆に過度の希望を抱かせたりしていることも多いと推定される。というのは、医師が自信のない場合は、患者にとって好ましくない情報についての議論を避けたり、根拠のない楽観論をせざるをえないことによる。結果的に医師は疲弊し、ますますストレスを感じる状態に陥ってしまう。

国立がんセンター東病院精神腫瘍部ではこれらの背景をふまえ、患者の意向を十分反映したコミュニケーションガイドラインを作成し、訓練に役立てている。本書は内富庸介先生、藤森麻衣子先生の編集により、わが国の精神腫瘍医、臨床腫瘍医、緩和ケア医、およびそのコメディカルが、患者とのコミュニケーションをいかに行うか

について非常にわかりやすく、しかも比較的簡単な場合からきわめて難しいと思われる DNR (do not resuscitate) に至るまで詳細に解説されている。現場の医師はこの本を一読することによって、患者とのコミュニケーションをどう行うかについての知識を十分に身につけることができると思われる。

内富先生たちは日本サイコオンコロロジー学会活動の一環としてコミュニケーション技能訓練講習会を開いてきた。この講習会では本や雑誌による知識だけでなくロールプレーによって実際にその方法を学ぶことができる。この講習会には日本臨床腫瘍学会の会員は割引で参加が可能であったが、平成 19 年度より厚生労働省委託事業として全国 4 か所で開催され、しかも無料となった。ホームページのお知らせ欄に掲載されるため、ぜひ出席、参加することを勧めたい。

●A5 頁 152 2007 年
定価 2,940 円
(本体 2,800 円+税 5%)
[ISBN978-4-260-00522-7]
医学書院 刊